随想

国際ピアノコンクールに参加して

天野敏昭
（大阪府立産業開発研究所研究員）
'98年大学大学院商学研究科修了
第9回国際アマチュアピアノコンクール優勝

厳寒といわれる一月のパリは、人から聞いていたほど寒くはなかった。それは、これから迎える本番の演奏に向けての緊張感と胸の高鳴りが、そう感じさせなかったのだろう。

私は昨年に引き続き、音楽を職業にしていないピアニストを対象にした国際ピアノコンクールを受けにきているのだ。昨年初めて参加してみて、その組織運営の良さや審査員の素晴らしさ、とりわけ暖かい聴衆の前で演奏できることの喜びを忘れることができず、再びはるばる遠い外国までやって来たというわけである。

参加者はやはりヨーロッパ人が多かったが、今年は昨年より参加国が増えたため演奏もより多彩になったように思われ、その演奏には国民性やお国柄が反映されているようであった。

ところで、海外の教育システムは日本と異なり複線型であるようで、一般大学で一般学科を学ぶほかに、国公私立の音楽院に通って音楽の専門教育を受ける人も多く、結果的にたまたま音楽が仕事でなかったという人も少なくない。また、小さいときから本物の芸術に触れる機会が多いことから、音楽に対しても聴衆すべてが自分なりの意見を持っている。私が特に嬉しかったのは、見ず知らずの人に呼び止められ、演奏について色々と意見を聞かせてくれたことである。詩に基づいて作曲された曲についてはフランス人としての解釈を教示してくれたり、また演奏に対して迎合あるいは批判するわけではなく加点志向で、暖かく評価してくれる点がとても嬉しかった。さらに帰国してからも手紙をくれる人もいて、個人主義で他人に干渉しないといわれるフランス人に対する先入観を打ち崩すに充分な体験であった。

価値観が多様化したといわれるが、海外に出ると私には日本人が皆同じように見える。それは、教育体系が一本化されていることも一因ではないかと思う。景気悪化がはなはだしい状況ではあるが、そうした時にこそ何百年と受け継がれてきた芸術にじっくり触れ、様々な可能性や価値観を見出したい。複線型の教育システムでそうした機会が増えれば日本も面白くなるかもしれない。

さてコンクールの結果の方だが、演奏自体は余り満足のいくものではなかったが、幸運にも一位と聴衆賞をいただくことができ、来年にはフランスで演奏できるとのことで今から楽しみである。

日本式教育再考

安藤仁介
（大学法学部教授）

ここ暫く日本の景気は低迷状況にある。その大きな原因は、政府・大蔵省の対策が後手後手に回ることであるが、私にはその背後にどうも教育の問題があるように思われる。

これまでの日本では、子供が生まれると親はまず、この子をどの大学へ入れようかを考える。そして、そのためには高校の三年間にこれだけ、中学の三年間にこれだけ、小学校の六年間にこれだけ、ひどい場合には幼稚園でこれだけと、それぞれ覚えるべき知識を定め、学校でも塾でもそれを詰め込む教育を実施する。しかも、各段階で定められた知識を覚え切れないと、「お前は駄目だ、お前は駄目だ」とお尻を叩かれる。

つまり、大学受験を基準とした知識の逆ピラミッドを身につけるよう強制されるわけで、私はこれを『知識偏重型・人間消去法教育』と呼んでいる。この方式の教育では、子供は学校へ行けば行くほど勉強が嫌いになり、ついには登校拒否をおこす。あの神戸の児童殺傷事件やキレル現象、極論すればオウム真理教事件も、この教育の弊害が表面化したものではないだろうか。

実は私は、これとまったく異なる教育の在り方を体験した。一九七六年から二年間、英国で研修の機会を与えられた私は家族を同伴し、それぞれ小学校五年生、二年生、一年生の子供たちを付近の学校へ通わせた。子供たちには「学校の勉強は分からなくて当たり前だから、体操と音楽だけはがんばれよ」といっておいたが、三人とも二年間登校拒否をおこさなかった。それよりも私が驚いたのは、PTAの会合に出るたびに、先生方が「私はこの子の持っている可能性をいかに早く見つけ、いかにうまく伸ばしたか」を自慢することであった。

このように英国では、教育の目的は子供たち一人ひとりの持つ特性を見つけ出し、それを伸ばすこととされている。この教育方式のもとでは、子供たちは学校へ行けば行くほど勉強が楽しくなり、自分に自信と誇りを持ち、ひいては他人を思いやるゆとりを身につけられるのではないだろうか。そして何よりも、新しい事態に直面した時に、自分自身で考え、柔軟に対策を立て、自分の責任においてそれを実施することができるようになるのではなかろうか。

日本型教育の成果とされる大蔵省の官僚が、経済不況に直面して後手後手の対策しか政府に提言できない事実を見せつけられるたびごとに、私は日本の教育を抜本的に再考すべき必要を強く感じさせられている。

大学での企業家教育

青山幸男
（ソーケンマネジメント㈱会長）
'55年大学経済学部卒業

数年来、日本の大学で企業家教育やベンチャー講座が盛んになってきた。私も大学やベンチャー支援機関で企業家教育やベンチャー講座を担当している。

繁栄する米国経済社会と閉塞状況にある日本の経済社会を比較する時にベンチャー企業の多発生と発展の差がひとつの大きな要因とも考えられている。その根底には日米の大学の企業家教育の違いがあると考えられる。

日本では明治以来、殆どの大学で大企業のサラリーマンや公務員など——使われる人材を育

てることをやってきた。米国の大学では、むしろ優秀な学生ほど大学、大学院で企業家教育を受け、自ら企業家（使う人になること）に挑戦する。大学、大学院でも企業家育成のための基礎的、実践的教育が充実している。ＭＩＴのように一つの大学が四千社を超えるベンチャー企業家を生み出しているのである。日本経済を再生するのは企業家である。

今日、大企業や中堅中小企業を見ても企業家がトップの会社は発展し、サラリーマン社長がトップの会社の多くは低迷している。日本の経済と社会を再生する一つのカギが企業家を多数発生させ、それを成長させることにある。私は日本の第一次ベンチャー時代に大企業を辞めベンチャー支援のベンチャー企業を創業した。私は関西ベンチャービジネス協会を創設し、通産省と東西ベンチャー協会で日本のベンチャー支援を行う公益法人ＶＥＣを創設した。私が、二十数年間にわたって提案し、実践してきたベンチャー支援がようやく全国的な行政施策となり、ベンチャーキャピタルや各種の支援機関も次第に本格的な取組みを開始しだした。同志社でも商学部大学院でベンチャー企業家育成講座が行われている。しかし、大学での企業家育成講座がその内容を充実して、本物の企業家を育てることに役立つためには一層の工夫と努力が求められる。早稲田が挑戦を始めたように学んだ企業家的学生を支援する大学の技術と人材や専門家、キャピタルなどの支援システムが連動することが望ましい。同志社が商学部のみでなく工学部や経済学部なども含めてハーバードやスタンフォードのように企業家教育に秀れた大学となることを期待する。私も自らの社会的使命として企業家教育、ベンチャー支援を更に続けるつもりである。

「人は天命を知り、使命に燃え、運命を拓く」という。同志社から時代を動かし夢を実現する企業家が、輩出することを願って止まない。

京都が羨ましい

有栖川有栖（作家）
'82年大学法学部卒業

大阪に住んでいるのに、卒業してから京都に足を運ぶのは年に三、四回程度だろうか。東京に行く頻度の方がずっと高いので、月に一度ぐらい通過はしているのだけれど。新しい京都駅も横目に見るばかりで、長い長い階段を上った展望スペースに上がったことが一回あるだけだ。その時、「なかなかいい」という印象を受けたものの、「どうしてこれを京都に？」と思いもした。古都の景観との調和に配慮をすべきだ、と言いたいのではない。「規模・機能・デザインとも、これは大阪にふさわしい駅ではないのか？」と感じたのだ。マッチ箱を立てたような無愛想な大阪駅ビル。デザインとしてあまりに貧しく、ちゃちで、あれは私が大阪で最も嫌いな建造物なのだ。京都駅が羨ましい。「それがわが街にふさわしいか否か」という議論が活発に交わされたことにも羨望を覚える。「これでええやろ」という具合に建った（としか思えない）大阪駅とは、雲泥の差があるではないか。

高さ制限を初め、様々な規制で縛られた京都で暮らしたり事業を行っている方々にすれば、デメリットに悩むこともあるのだろうが、「京都はいかにあるべきか」「どういう表現がふさわしいのか」という眼差しが内にも外にもあるという都市は、やはり幸福だろう。

セーヌ川のポン・デ・ザール

を模した橋を鴨川に架けるかどうかで賛否が対立していることが全国ニュースになるのも、いかにも京都らしい。東京だったら、「シラク大統領からプレゼントとは光栄だ」と、ほいほい二つ返事で頂戴していただろう。そうとは限らない、と言う方がいらっしゃるかもしれないので、こんな広告を紹介しよう。今年、お台場にオープンした某ホテルのキャッチコピーだ。ペレインボーブリッジを渡って始まる新しいストーリー。ここは、東京でありながら、〝パリの21番目の区〟なんだそうだ。嘯うより前に、哀れである(おそらく、これを書いたのは江戸っ子ではないだろうけれど)。

繰り返すが、「あなたにはこんお召しものが似合うのでは」「そんな恰好はおやめになった方がいいですよ」と、おせっかいな口出しをされる京都が、私は羨ましい。

個人と母国

伊勢桃代
(財団法人女性のためのアジア平和国民基金専務理事事務局長)
'55年女子高等学校卒業

長い国連勤務を終え、昨年定年退職をし、日本に戻って参りました。振り返ってみると幼稚園から大学院へと長い期間を、教育機関、教育組織でお世話になり、その後幾つかの組織での勤務そして二十七年間のニューヨーク国連本部での生活と、人生の大部分を組織の中で過してきました。やっと「組織」と云うものから離れ、これからは個人として、若い世代の人々に何か尽す事が出来ればと考えています。こう云った考えの背後にはやはり新島先生の生き方の影響が強いものと自覚しています。

多くの人々にとって定年退職は人生の一つの危機に直面する時だと思います。「組織」と云う大樹を離れ、個人に戻る時なのです。国際機関の職員、いわゆる国際公務員にとってもその危機感は同じです。その上に大変なのは、国際公務員は、自分と自分の母国との関係をはっきりさせなければならない時でもあるのです。そもそも国際公務員は世界中何処にでも行き仕事をしなければなりません。ですから国際機関で働く大多数の職員は自国を離れている人達です。しかも平均二十五年、実に一世紀の四分の一を国際機関に捧げます。この間、家族特に子供達は教育を異国、多くの場合先進国での学校教育を受けることになります。従って親の母国との接触も途絶えがちになります。こう云った事情の中で、定年退職後母国に戻るのか、何処に定住するのかは、深刻な問題です。先進国からの大多数の職員は自国に戻り生活を再建出来るでしょうが、世界には崩壊した国や政治的経済的に破綻した国が多くあります。例えばソ連崩壊後の国々に子供を連れて帰国するのは相当の決断を有します。アフリカの幾つかの国では、内紛による虐殺が続いています。何とか国家平和の為に尽そうと帰国される方もありますが並大低の事ではありません。又多くの場合、帰国する事により子供達と離れてしまい、会うのもままならない状態になってしまいます。人生の大部分を国連で過した後、母国に帰れない同僚の多いことを思う時、日本と云う自分の国がある事に感謝せずにはおられません。久し振りに帰国した日本での感想はいろいろあります。国際社会の場で日本を外から見て参りましたが、ある危機に面している国だと云う感じはあります。

日本の危機を感じ渡米され、そして帰国され教育を通じ、若い世代を創り上げようと一心に

努力された新島先生を考える時、新島襄と云う一人の人間が国の改革に寄与し得た力と世代を越えた影響力の偉大さに驚かされます。同志社で教育された事は私の人生の基盤となり支えて頂きました。

ティーアンドテイスト

森田恵子
（料理・紅茶文化研究家）
'61 大学文学部英文学科入学

最近紅茶専門店やティールームが増えています。意外に安くておいしいティーが飲めるお店、いろいろな雑誌にのっていて有名なようなのにあまりティーやケーキがおいしくないお店などがあり、雰囲気を売っているのかなと思ったりします。

十七世紀の中頃に中国の緑茶が英国に伝えられましたが、最初はコーヒーハウスで売られていました。百日以上かかって運ばれたあまり質のよくない緑茶が樽にいっぱい作られ、また温め直して出されたのですから、今の人が飲めるようなものではなかったかもしれません。それでも珍しい飲物であるティーはしだいに英国の人々の間に広がっていきました。十八世紀になり、今のトワイニング紅茶の創始者のトーマス・トワイニングが初めて女性も出入りできるお店を作りました。英国の人々が烏龍茶系のティーを好んで飲むようになり、酸化発酵を強めていくうちに紅茶ができました。英国は中国からじつに二百年もティーを買い続け、十九世紀の中頃に植民地であるインドに、その少し後にセイロンに茶を栽培するようになり、ティーは英国の国民的飲料となりました。ロンドンにティールームが登場したのは十九世紀の終わり頃で、A・B・C（エリエイティッドブレッドカンパニー）というパン屋さんが客にティーを出したのが始まりと言われています。これより少し後に、スコットランドのグラスゴーにすばらしいティールームが作られたのです。ケイト・クランストンは最初紅茶販売のビジネスをしていた兄の力を借りてティールームをスタートさせました。グラスゴーで開催された万国博覧会をきっかけに、ミス・クランストンは彼女の審美眼、完璧主義をつらぬいた美しいティールームを次から次へと開店させていったのです。英国ではなかなかその才能を認めてもらえなかった建築家マッキントッシュに設計の全てをまかせて作らせたティールームは、当時パリの芸術運動アールデコと同じ感覚でした。ミス・クランストンはマッキントッシュを始め、若い、特に女流アーティストたちの理解のある力強いパトロンでした。マッキントッシュの妻マーガレットもメニューや壁紙などをいっしょにデザインしたウィロウ・ティールームは現代の生活にもぴったり合うようなすばらしいティールームです。

私は、ペリラ・キンチン著『ティーアンドテイスト』を読み、あのシャープなデザインのハイバックチェアを残したマッキントッシュがグラスゴーでティールーム発展に大きな役割を果たしていたことを知り、私の突き進んでいる紅茶の世界の新しい扉がもう一つ開いたような気がしてエキサイティングな気分になっているこの頃です。

私の元気の源

奥野史子
（スポーツコメンテーター）
'95 年大学商学部卒業

こんなに夜も眠れぬ程興奮したのは、さていつ以来のことだろう。ゼロ泊三日のサッカーW

杯、対アルゼンチン戦の応援ツアーに私は一ツアー客として参加した。機中二泊現地滞在時間はわずか十四時間。「国内旅行じゃあるまいし、何を考えているんだこのツアーは」と思った。しかもツアー代金三十万円は、決して安くない。と言うよりは高い。サッカーに興味のない人にとっては、とんでもないことに違いない。

「この不景気に何を考えておるんだ」という厳しい意見もあったが私はあえてフランス行きを決めた。スポーツに真剣に取り組んだことのある人にならこの気持ちは解ってもらえるのではないかと思うが、あの大舞台の空気を感じ、世界のそうそうたる強豪とぶつかる日本代表の姿をこの目に焼きつけておきたいという一心だった。お金じゃない、感動を得るためにフランス行きを決意した。

ツアー参加申し込みを済ませ連日、新聞・雑誌・TV等で研究(?)し、いよいよ気持ちも高揚してきた出発一週間前、突然のアクシデントが起った。「チケットがない」そんな——何かの間違いであることを祈った。しかし残念なことに誤報ではなく本当にチケットはなかったのだ。多くの人がパニックに陥った。

今思えば初めから何かおかしい?と、多少感じていた。なぜなら、たかが四万人しか入れないトゥールーズの球技場に、あれだけのツアーが各社から募集され、これだと日本人サポーターしかいないのではないだろうか?と思ったこともあった。しかし試合が近づくにつれ、そんな疑問は私の頭の中からすっかり忘れ去られ「もういくつ寝るとワールドカップ」などとうかれ状態だったのだ。そのニュースを新聞で知り即、旅行会社に問い合わせると「現時点でチケットはツアー全員分確保できていません」とのこと。しかしこまできたら意地でも試合を観たいと私はフランスへ飛んだ。自分でもふっと「何をやっているんだろう」という気持ちがあった。不景気不景気と暗い顔をしていなければいけないような風潮のある世の中よりは、よっぽど元気があっていいじゃないかと私は思ったのである。

確かに世間は不景気だと感じる。だからこんな時こそ元気にならなきゃ始まらないのではないか。私はW杯で感動し勇気と元気というエネルギーを充電することができた。試合には負けたが高くジャンプするには一度は低くしゃがまなくてはならない。今回はしゃがんだ。だから四年後はジャンプする番だ。

「生きる」ということ

竹本成徳
(生活協同組合コープこうべ理事長)
'54年大学法学部卒業

つい最近、生きるということを、あらためて考えさせられる経験をした。長年、私の所属するコープこうべで福祉のボランティアとして活躍してきたAさんが、数年前に五十代半ばである病気にかかった。知らない間に外出し、徘徊したりするので目を離せない。ご主人は、病気のヒントになる情報を東奔西走して聞きまわったが、妻の行動を理解するには至らなかった。ところがある日、福井県のある医師の診断を仰いだ結果、「若年性アルツハイマー」であることが判った、というのである。

私は、長年、やはり福祉活動に携わってきたベテランの女性相談員の方と二人でAさんの家庭を訪問した。ご主人はさぞ苦労され苦しんでいるに違いないと思いつつ訪ねると、なんとすばらしい顔をして私たちを迎え入れてくれたのである。表情が温和で輝いているのだ。

病気のAさんは、身体を震わ

せるなどしてじっとしていられない様子で部屋の中を動きまわっている。ご主人が私たちのいるソファに、「ここにかけなさい」というと、来て腰を下ろした。同行の女性が手を握ってあげると、Aさんは顔になんともいえない笑みをたたえたのである。その時ご主人が言うには、「家内は安心したとき、こんな顔をするのです」。時々役所の方が様子を見に来たりすると、震えはひどくなり、顔つきはこわばるのだそうだ。

妻の発病からは、会社勤めをする自分と二人の子供が協力し合って面倒を見てきたが、上の娘は結婚した。下の息子も長じて職に就き家を出て行った。

ご主人は定年まで二年を残して会社を辞めた。毎朝食事をすませると二人で片道二キロの神社まで散歩するのが日課だ。「ぼくは、残る人生を妻のために尽くしたい」という。妻とは三十年元気で幸せな生活をしてきた。その分だけ恩返しをしたいと聞いて、私は胸を打たれた。「一緒にいてやると妻の行動が変わる。アルツハイマーにも安心が一番ですね」。生きるということは、苦しみや、悲しみを確認することだ。生きることはすばらしいことだと思うのである。

海外在住における子供への教育

和谷泰扶
（ホーナ・コンセルバトリウム　ハーモニカ主任講師）
'83年大学商学部卒業

南西ドイツの小さな街「トロッシンゲン」に住んで十四年の歳月が過ぎようとしています。

その間、公私を含めていろいろな出来事がありました。一番印象に残るのはやはり東西ドイツの統合。歴史的瞬間をドイツで迎えたことに感慨深いものがあります。

私生活においても変化があり、一人娘はこの秋から現地の小学校に通います。ドイツで生まれ、現地の幼稚園に通い、ネイティブなドイツ語を身に付けつつある娘は、日本語も普通に話しますが、だんだんとドイツ人の考え方、感覚を持つ日本人になってきているようです。

しかし、いくらドイツで教育を受け、娘自身がドイツ人と同じように思っても、日本人であることを捨ててドイツ人に帰化をしない限り、いつまでも在ドイツ日本人という事に変わりはないのです。

日本人である以上、日本語の読み書きはもちろんのこと、日本語を媒体にして日本という国、文化をきちんと理解し、日本人としての感性も磨いていってほしいと思うのですが、この地方に住んでいますと、近くに日本語で遊ぶ友達がいない、日本語を話す機会が家の中でしかない等の問題もあります。

少しでも、日本語にふれる時間をと思い、日本のビデオを見せたり、日本からの通信教育をさせたり、日本の本を取り寄せたりと様々な事をしてまいりましたが、昨年から、この町から百キロメートル離れたシュトゥットガルトまで週一回、日本語補習授業校に通い始めました。そこで、教科書を使って授業を受け、休み時間に子供同士で遊ぶという、日本ではごく普通の事を通して、自分が日本人であるという事への自覚が出てきたように思われます。

娘は選んでドイツで生まれたわけでもないし、住んでいるわけでもありません。ですから、なおのこと、日本語を徹底させて、彼女が成人した時に、自分で、住む所を選び得るようにさせておくということが親の務めではないかと考えるのです。